

下駄も使いよう

三浦 福助

昭和 20 年代、私が子供の頃は普段でも皆が下駄をはいていたものです。よほど他所行きで無いと靴などを履くことは無かったように覚えています。小学校に通うのも下駄履きで、学校では草履に履き替えたりしました。お金持ちの家の子は、靴を履いていることもありましたが、雨の日の長靴などはうらやましいものでした。昭和 20 年代はそのような時代で、30 年代になってから運動靴(ズック靴などとも云いました)が普及し始め、今では革靴、スニーカーの天下になりました。いずれ何十年かすると、子供たちに下駄を見せても「これはなあに」という事になるかもしれません。

さて、図-1 をご覧下さい。これも下駄です。しかも桐の下駄なのですが、何なのでしょう、どんな時に履くものでしょうか？



図-1 ? ? ?

なかなか頑固な造りで、底一面に竹製の丈夫な串が植えつけてあります。かなり使い古したものか、一部の串が折れていますが、それだけ活躍したという事かもしれません。勿論、一般歩行用のものではなく、ある作業用のものなのですが、それは屋外での作業です。串の先が磨り減って平らになっていますが、本来はある物を突き刺すための串なので鋭く尖っていたのです。長年の使用で磨耗してしまったのです。寸法も普通の下駄よりも大きく、それだけ踏む面積を広く取ってあるという事です。

さて、何でしょうか ? 一寸考えてください。

これは「ねずら下駄」と云って、ネズラを獲るための下駄なのです。ネズラというのは、アカシタビラメ(カレイ目ウシノシタ科ウシノシタ属 *Cynoglossus joynei*)の新潟県周辺での地方名です。

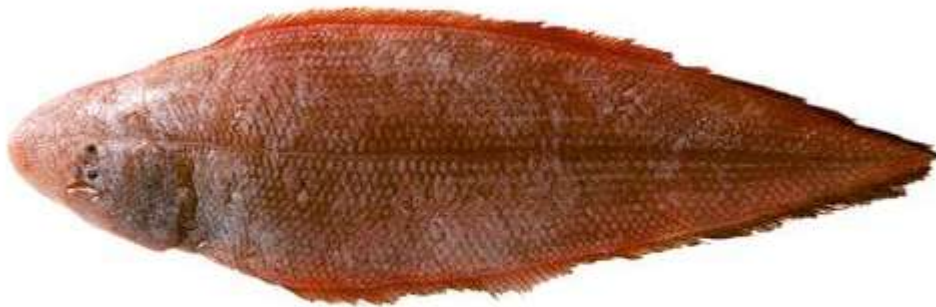


図-2 アカシタビラメ

ものの本によると、「体長は最大30cm、南日本に多いが、多少、北日本にも分布している。ウシノシタ類中で最も美味でフライ用としても好まれる魚種である。」などの記載があります。福井県ではアカネズリなどとも呼んでいるということですから、ネズラ、ネズリなどはシタビラメの通称かもしれません。

そうです!!! お察しのとおり、この下駄を履いて砂底の海中に入り、アカシタビラメを踏みつけて串に刺して獲るのです。アカシタビラメは通常は25~40mの海底にいるそうですが、おそらく産卵期(初夏の頃)に人の背位の浅海の砂浜に集まるのでしょうか。これを狙って、この下駄を履き、ここぞと思う辺りを歩き回るのでしょう。そして、グニャカズブという足の感触で魚を刺し獲った事を知り、ヤッター、ということで下駄から魚を外して魚籠に入れるのではないのでしょうか。ワクワクして、一度やってみたいような面白い漁です。

“なにも銚子を作って突けばよいじゃないか”とも思いますが、ある程度水深もあることでしょうかから、海面からは見え難いのでしょうか。そして、魚群がかなり密なのでこのやり方が効率が良いのかもしれません。昔、聞いた話では戦前に水路部が千島の海底調査をし、底質採集のために小型のドレッジを落とすのだそうですが、何回やってもカレイをつかんでくるのだそうです。調査官がついには切れて「底質、カレイ!!!」と叫んだということです。海底一面にカレイがいたということでしょう。

そのような訳で、この珍しい下駄が立派な漁具だったのです。この下駄は、福島県喜多方市の「会津桐の博物館」にあります。新潟の下駄屋さんにも、復元したものが1足あるそうです。何時の時代に誰が考案したものか、実際の使い方などは分りませんが、それぞれの生活の中で思いついたものでしょう。

図-3 もご覧下さい。これも会津桐の博物館に展示してある下駄で、奈良県大和高原でお茶の葉を細かく刻むための下駄です。細かくしたお茶の葉を石臼で挽いて、抹茶にするのだそうです。昭和の初めまでは使っていたということですから、江戸時代、明治時

代には広く使われていたのかもしれませんが。ねずら下駄もあるいは似たような変遷があったのかもしれませんが。



図-3 茶っ切り下駄

魚を取る道具は、時代、地域により色々な工夫で生まれたものがあり、今から見ると面白いものです。ねずら下駄などもごく面白いものですが、面白いだけでなく、昔の人の生活を偲ぶよすがともなるのではないかと愚考する次第です。

(平成 22 年 10 月 22 日)